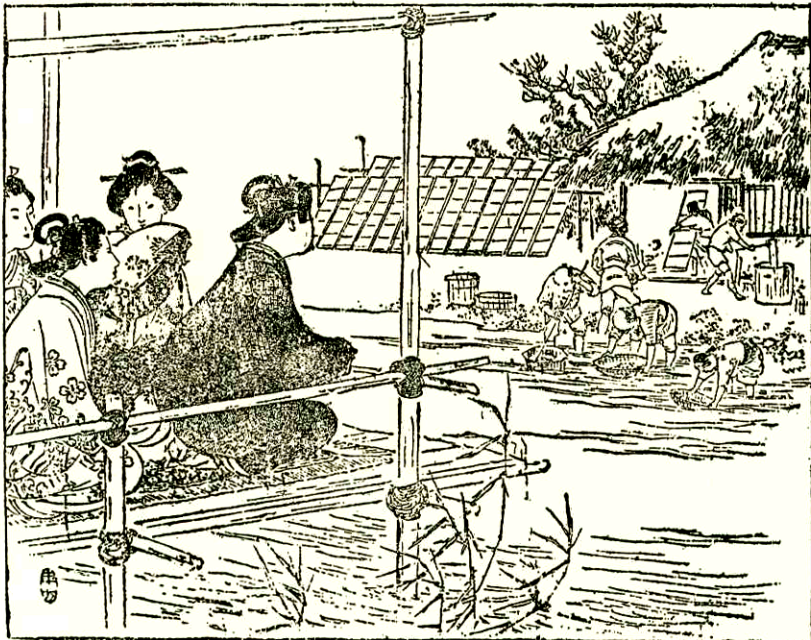


紙を大切にした黄門様のおはなし



(明治33年発行 高等小学校用修身教科書 第十課徳川光圀「節約」挿絵)

「水戸黄門」として知られる水戸藩2代藩主徳川光圀は、日々儉約につとめ、みずから質素な生活を送っていました。殿中で働く御女中たちにも「紙のおだ使いをしてはならぬ」と言い聞かせますが、直す者はほんの少しでした。光圀公は、ある冬の日「紙を漉く仕事は面白いものだから、お前たちも城の外の紙漉き場へ行き、見物するとよい」と、女たちに告げました。

喜んで城を出た御女中たちが案内された紙漉き村こそ、ここ、松之章でした。

御女中たちのために川の上にしつらえられた棧敷は、竹箆の上たけすに薄い敷物があるばかりで四方は吹き放し。北風の中、寒さに凍えつつ、多くの村人が川辺でつらそうに働く姿を見て帰った御女中たちは、「面白かったか」との光圀公の問いに、「村人たちが、寒風に吹かれながら苦勞して紙を漉いている姿を思えば、一枚の紙も粗末こまつには出来ないと身にしみてわかりました」と答え、それから紙のおだ使いはなくなったそうです。このお話は、明治から大正時代の修身の教科書しゅうしんに採り上げられた有名な逸話いっつわです。